

# 新明解 古語辞典

第二版

監修 金田一京助

編者代表 金田一春彦

# 新明解 古語辞典

第二版

監修 金田一 京助

編者代表 金田一 春彦

三省堂

## 明解古語辞典の歴史

昭和 28 年 4 月 15 日	明解古語辞典	初版発行
昭和 33 年 11 月 5 日	明解古語辞典	改訂版発行
昭和 37 年 10 月 1 日	明解古語辞典	新版発行
昭和 42 年 11 月 1 日	明解古語辞典	修訂新装版発行
~~~~~	~~~~~	~~~~~
昭和 47 年 12 月 15 日	新明解古語辞典	初版発行
昭和 52 年 12 月 1 日	新明解古語辞典	第二版発行



## 新明解古語辞典 第二版

定価 一、六〇〇円

昭和五十四年一月十日 第六刷発行

編者 金田一春彦（きんだいち・はるひこ）

三省堂編修所

発行者 株式会社 三省堂 代表者 上野久徳

印刷者 株式会社 三省堂 八王子工場

発行所 株式会社 三省堂

〒101 東京都千代田区神田神保町一の一  
電話 東京(03) 323-2401(代)／振替口座 東京 6-15200

商標登録番号 323546・305264

<2 版新明解古語・1,344 pp.>

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

## 序

姉辞書『明解国語辞典』が表を新たにして『新明解国語辞典』として脚光を浴びたのに従い、妹辞書『明解古語辞典』も『新明解古語辞典』としてお目見えすることを、産みの親として嬉しくまたおもはゆく思う。

『明解古語辞典』がこの世に呱々の声を挙げたのは昭和二十八年で、その後、行き届かなかつたところを三十七年に改訂して『明解古語辞典 新版』の名で世に送つた。今度の版は、生を受けてから二十年、まさに娘盛りになつたわが子を送り出す母親の心境である。長いことひいきにして御愛用くださつた方々にその成長ぶりを見ていただきたいとともに、ここに至る間にたえず有益な御忠言・親身の御叱正をくださつた各位に厚く御礼申し上げる。

この辞書はもともと専門の学者を相手としたものではなかつた。古典を勉強する高校以上の学生諸君や、古典に親しもうとする一般社会人の方々に、利用・活用していただくための辞書として誕生した。今度はその個性を一層はつきり打ち出してみた。用例を広く高校以上の古典の教科書から集めたこと、また名歌・名句と言われる作品は、その全体の解釈をもそえたこと、語釈は今まで以上に現代向きに、平易にと改めたことなど、それである。もちろん、学界での研究の進展とともに新しい解釈・訓み方が定説となつたもの、用例にあげた本文が訂正されたものは、すべて取り入れる労を厭わなかつた。

今度の全面改訂に当たつては、その方面的解釈の第一人者、石川徹氏に重要語はすべて改めて稿を起こしていただいたことを特記する。また、上代語は、新たに委員として西宮一民氏の参加を得たのは幸せだった。辻村敏樹・永野賢・秋永一枝三氏の協力は従前どおりである。なお、基本的な語彙については、特に高校古典教育に詳しい堀内武雄氏をわざらわして適切な表現に改めた。また、めんどう

うな幹事の役は、今度は新進氣鋭の関谷浩君が寝食を忘れてつとめてくれた。ここに感謝の意を表する。

最後に、辞書がいよく出来上がるに当たり、三省堂の方々のお世話になることが大きかったことを銘記しておきたい。ことに、この前の『新版』の時もこの辞書を担当され、辞書作りにかけてはベテランである倉島節尚氏がその経験をフルに生かして辞書の出来上がりに尽力してくださったことは、永く忘れまい。卷頭に掲げた見事な色刷りの口絵は、その語句の理解に絶好のものと思うが、編修に關係された多くの方々の苦心の配慮になるもので、私にとっては、成人式に臨む娘のお祝いに豪華な晴着を贈られたような思いがする。

昭和四十七年十二月

編者代表 金田一春彦

## 第一版序

新明解版を世に送つてから五年、教育界・学界の進歩に応じて、この辞書も多少の改訂を施さざるを得なくなつた。今回の改訂は、本文では、基本語の解説の整備、重要語彙の指示、参考事項の注記などが主で、付録では「枕詞一覧」「掛け詞一覧」の新設、「用例出典一覧」「古典文法事項一覧」の充実が主なものであるが、全般に亘り、新しい学説の尊重すべきものを大幅に取り入れた。意のあるところを汲まれ、活用していただきことをお願いする。今度の改訂に当たっては、辻村・西宮・秋永の三委員のお力にすがることが大きく、また幹事を設けることをしなかつたので、その分三省堂編修所の倉島節尚氏に労力奉仕を強いた。ここに慎んで感謝の意を表する。

昭和五二年一〇月一日

編者代表 金田一春彦

# この辞典を使う人のために

## 総記

一、この辞典は、日本の古典をひもとく人々に、手軽に活用していただくように編集したものである。

二、本文に収めたところは、だいたい次ののような語、約四万二千である。

- (1) 古典に用いられて現代では用いられなくなった語、耳遠くなつた語。
- (2) 現代でも用いられているが、古典では違つた意義に用いられる語。

古典に用いられる重要な慣用句・ことわざ・枕詞の類。  
古典にあらわれる重要な地名・歌枕の類。

- (3) 文化史用語・文学史用語のよう、古典を読む場合に特に心得ておくことが望ましい語。
- (4) 助詞・助動詞・接辞・造語形の類。

三、いちいちの語の解説・記述は、原則として次のような形式・順序に従い、必要に応じて挿し絵を補つた。

- (1) 見出し
- (2) 漢字表記
- (3) 発音
- (4) 文法的性格
- (5) 語源・語史
- (6) 語義
- (7) 用例
- (8) 参考記事

四、卷頭には「襲の色目」「服飾」「武具」「建築」「樂器」その他を色刷りで掲げ、巻末には「古典語解釈のしおり」「読解用語

便覧」「用例出典一覧」「主要古典文法事項一覧」「枕詞一覧」「主要年中行事一覧表」「官職表」「日本文化史年表」「漢字の読み方一覧」「歴史的かなづかい一覧」その他を付録として添え、古典語の説解にいつそう便利であるよう配慮した。

## 本文の解説

### 一 見出し

#### 1 表記法

- (1) 和語・漢語・梵語はひらがな・ゴシック体で、いわゆる外来語はカタカナゴシック体で示した。
- (2) 歴史のかなづかいによつた。ただし、拗音・促音は小字右寄せで示した。
- (3) 外来語の長音は「ー」で示した。

○江戸時代の文献などには、いわゆる歴史のかなづかいと異なる表記が見られるが、これらも歴史のかなづかいに統一した。

○諸学者の研究により、従来のかなづかいのまちがいが明らかになつたものがあるが、この辞典ではそれらの研究の成果を取り入れたものがいくつかある。たとえば、「すゑ(水出・垂蓑・粹・推・辭・翠)」の類は「すい」に、「つゑ(対・追・鎧)」の類は「つい」に、「るゐ(異・誣・類)」の類は「るい」に統一した。その他「おう(翁)」「かう(譜)」「がう(陰)」「ほう(空)」「もう(毛)」などのように統一した。この種のものは、付録「歴史的かなづかい一覧」の中に、\*印をつけて示した。なお、「法」は仏教用語に限り「ほふ」に統一し、同じく△印をつけて示した。

○後世撥音に転じた音節は「ん」と表記した。ただし、奈良時代のみ口語として使われたものは、「かむかぜ」のように「む」と表記し、「む」「けむ」「らむ」「なむ」の類は、「む」および「ん」の

両様の見出しが出した。

(八) 現代かなづかいと異なるため、検索しにくい字音かなづかいは、

**じゅう**【柔・蹂・獸】 ⇨ **じゅう**

**じゅう**【入・十・什・汁・渋】 ⇨ **じふ**

**じゅう**【中・住・重】 ⇨ **ぢゅう**

のように示し、現代かなづかいから容易に検索できるようにした。

複合語は、複合要素を適宜「・」で句切って示した。

○ただし、固有名詞の見出しには示さなかった。

(4) 活用語は、原則として終止形をあげ、いわゆる語幹と

語尾の間に「・」を入れた。ただし、

(イ) 形容動詞および漢字二字以上から成るサ行変格活用

の漢語動詞は、紙面の関係上、語幹だけを示した。

(ロ) ある特定の活用形を見出し語とした場合は( )の中

にその活用形を明記した。この場合、語幹と活用語

尾の間に「・」を入れなかつた。

(ハ) 形容詞のシク活用は「一し」までを語幹とした。

接辞は、他の語に接する部分に「・」をつけて示した。

複合語・派生語のうち、最初の三音節またはそれ以上

にある部分がすでに項目として立っている場合には、

それと一致する部分の見出しがなを「—」で省略し、す

である項目(=親項目)に追い込んで掲げた(=子項目)。

〔例〕 やまと【大和・倭】(名)……—うた【大和歌】(名)

○ただし、子項目を、省略体その他構成の異なる親項目、および清濁など表記の少し異なる親項目の条に追い込む場合は、見出しがなを「—」で省略せず、もう一度全体を示した。

(7) いわゆる慣用句・ことわざ・一部の枕詞<sup>まくらことば</sup>のような連語については、

(イ) 親項目を持つ連語は、見出しがなをつけて、親項目

と一致する部分を「—」で省略し、漢字かなまじりのゴシック体で示した。

〔例〕 いへ【家】(イ)(名) ……—一つ鳥

○連語は、複合語と異なり、同語源ならば親項目の音節数に関係なく追い込んで掲げることを原則とした。

○漢字表記に制約があつたり、清濁が異なつたりする場合は「—」で省略せず、見出し全体をゴシック体で示した。

(ロ) 親項目を持たない連語は、その全部を見出しがなによつて示し、独立の項目とした。

〔例〕 いはせーもーはて・ず【言はせー】(ゼウ)(連語)

さら・ず(連語)

重要語の表示

古典の正しい読解のために最も重要な語約三二〇語、そ

れに準ずる語約九九〇語を選び、前者には\*\*印、後者には

\*印を、それぞれの見出しの上に付した。

重要語の選択に当たつては、次のような語を目標にした。

語義が多岐に分かれ、古典解釈上注意を要するもの。

多くの複合語を作るなど、基本語的性格の濃いもの。

古典文学における使用頻度の高いもの。

最近の高校古典教材に頻出するもの。

## 2

### 3 配列

(5) 古典全集などで解釈注が付されることが多いもの。

○他辞書の重要な語表示をも参考にした。

語の配列は、見出し語のかな五十音順によつたが、見出し語が同じかな場合には、次の原則に従つた。

#### (1) 発音について

(イ) 清音・濁音・半濁音の順に並べた。

(ロ) 拗音がなの「や」「ゅ」「よ」は、いわゆる直音がな

の「や」「ゅ」「よ」よりあとに並べた。

(ハ) 促音がなの「つ」は、直音がなの「つ」よりあとに並べた。

(ニ) 外来語に現われる長音「ー」は、その発音を考え、それぞれア・イ・ウ・エ・オの次に並べた。

(ツ) 単語(感動詞・名詞・動詞・形容詞・形容動詞・副詞・連体詞・接続詞・助詞・助動詞)・接辞(接頭語・助数詞・接尾語)・造語形・連語の順に並べた。

○同音の名詞では、名詞・代名詞・数詞・形式名詞の順に並べた。

○同音の動詞では、自動詞・他動詞の順に、同音の形容詞では、形容詞・補助形容詞の順に並べた。

○同音の動詞では、自動詞・補助動詞の順に、同音の形容詞では、形容詞の順を、四段・上一段・下一段・上二段・下二段・変格活用の順に並べた。この場合「自動詞・他動詞」

の順を、「四段・上一段・下二段・上二段・下二段・変格活用」などの順より優先させた。

○語源の同じものは同一項目に含め、語源順に並べた。

○品詞の区別などについては「四 文法的性格」を参照されたい。

(3) 同音・同品詞のときは、見出しがなど発音の同一のものを先に並べた。

(1) 同音・同品詞のときは、見出しがなど発音の同一のものを先に並べた。

(ロ) 同音・同品詞のときは、見出しがなど発音の同一のものを先に並べた。

(ハ) 語構成を考え、「ー」のないものを先に並べた。

○ただし、固有名詞は「ー」がなくとも、名詞のいちばん最後に並べた。

見出し漢字のないものを先に並べた。

見出し漢字の字数の少ないものから先に並べた。

同字数のときは、画数の少ないものを先に並べた。

字音がな検索のため、ミシンケイで囲んで示した現代かなづかいの見出しは、同じかな最初に並べた。

子項目として追い込まれた連語・複合語は、連語・複合語の別なく五十音順に並べた。

○複合語の配列については「一 見出し 1 (6)」を参照されたい。

○連語の配列については「一 見出し 1 (7)」を参照されたい。

(6) 接辞はすべて独立見出しとし、これと同音・同語源の語が見出し語にあるときは、その語のすぐ次に接辞を並べた。

(7) 接辞はすべて独立見出しとし、これと同音・同語源の語が見出し語にあるときは、その語のすぐ次に接辞を並べた。

(8) 漢字表記は見出し語にあるとき、その語のすぐ次に接辞を並べた。

(9) 漢字表記は「ー」で囲み、送りがなは、ひらがな・歴史的かなづかいで示した。

## 二 漢字表記

見出しがなの次に、その語に対して、古典では多くのような漢字が当て用いられてきたかを、次の原則に従つて示した。ただし、極端なあて字の類は示さなかつた。

(1) 漢字の字体については

うな漢字が当て用いられてきたかを、次の原則に従つて示した。ただし、極端なあて字の類は示さなかつた。

(2) 漢字表記は「ー」で囲み、送りがなは、ひらがな・歴史的かなづかいで示した。

(1) 漢字表記は「ー」で囲み、送りがなは、ひらがな・歴史的かなづかいで示した。

(2) 漢字表記は「ー」で囲み、送りがなは、ひらがな・歴史的かなづかいで示した。

(3) 漢字表記は「ー」で囲み、送りがなは、ひらがな・歴史的かなづかいで示した。

(4) 漢字表記は「ー」で囲み、送りがなは、ひらがな・歴史的かなづかいで示した。

(3) 古典に用いられた漢字表記が二種以上あるときは、原則として、語源に近いと見られるものから先に並べた。  
 (4) 見出し語の二音節以上に当たる部分が、ひらがなで書かれることが普通であるときは、語構成を考え、その部分を「—」で示した。

〔例〕さは・やか〔爽〕

(5) 子項目としての連語は見出しがなをつけて、直接漢字かなまじりの表記をゴシック体で示した。必要に応じてその読みを( )あるいは( )内に歴史的なづかいによつて示した。また複合要素を「・」で分けず、活用のあるものは「・」によつて語幹と語尾の区別を示した。

### 三 発 音

その語の発音が、見出しがなと一致しない場合には、その発音を漢字表記のあとに、次の原則に従つて示した。ただし、ぢ(=ジ)・づ(=ズ)・ぢや(=ジャ)・ぢゅ(=ジュ)・ぢょ(=ジョ)・ゑ(=エ)・ゑ(=オ)の発音は、いちいち示さなかつた。

(1) カタカナで表音式を用いた。

(2) 特に発音を示す必要のない部分が一音節以上あるときは「—」で示した。この「—」は、見出しがなの「・」の切れに従うが、紙面の節約上、次のような特例を設けた。

〔例〕だいじやう・だいじん〔太政大臣〕(名)

親項目と重出する子項目の発音は示さなかつた。

〔例〕ゑんちやう・こくい〔円頂黒衣〕(名)(連語)

(5) 子項目としての連語の発音は示さなかつた。  
 ○時代によつて発音の異なるものは、発音の位置に示さず、( )の中または参考欄に注記した。「五 語義4」を参照されたい。

### 四 文法的 性 格

1 各語の文法的性格は、( )で囲み、次のように略語をもつて示した。

(1) 品 詞	(感) 感動詞	(名) 名詞
(代名)	代名詞	(数) 数詞
(形名)	形式名詞	(自動) 自動詞
(形)	形容詞	(補助動詞)
(形動)	形容動詞	(補助形容詞)
(連体)	連体詞	(副)
(間助)	間投助詞	(接)
(係助)	係助詞	(接続)
(他動)	他動詞	(終助)
(格助)	格助詞	(副助)
(並助)	並立助詞	(接助)
(接頭)	(接頭語)	(接動)
(接尾)	(接尾語)	(助動)
(連語)	(連語)	(助數)
(四)	四段活用	(造語形)
(下二)	下一段活用	造語形成分
(上二)	上一段活用	

## 2

- (ナ変) ナ行変格活用 (ヲ変) ヲ行変格活用  
 (サ変) サ行変格活用 (カ変) カ行変格活用  
 (ク) 形容詞のク活用 (シク) 形容詞のシク活用  
 (ナリ) 形容動詞のナリ活用  
 (タリ) 形容動詞のタリ活用  
 (特活) 助動詞の特殊活用  
 ○助動詞・接尾語の活用は、動詞・形容詞に準じて、(助動下二)  
 (接尾四) (接尾シク) のように示した。  
 ○特定の活用形の例しか見えず、活用の種類を決められないものは、  
 (自動連用) のように示した。  
 教科書の用法に従つた。ただし、次の点に注意されたい。  
 (1) 名詞の中で、代名詞・數詞・形式名詞は特別に示した。  
 (2) 動詞には、自動詞・他動詞の区別を示した。また、動詞では補助動詞、形容詞では補助形容詞を特別に示した。  
 (3) 形容詞は、文語は(形ク)(形シク)とし、口語のみに使われるものは(形)とした。  
 (4) 形容動詞は、(形動ナリ)(形動タリ)のように示した。  
 (5) 口語のみに使われるものは(形動)とした。  
 (6) 終助詞・係助詞・副助詞・格助詞・接続助詞・並立助詞の順に示した。  
 用言については、活用の種類を示した。  
 ○活用の種類は古典本位にした。活用が時代とともに特殊な変化をしたものはその旨を注記した。

## 五 語 義

## 1

- 1 語義の解説は、原則として次の順序によつて行なつた。  
 (1) 語源・語史 (2) 位相 (3) 説明  
 (4) 現代語訳 (5) 補助的解説

## 2

- 2 表記法  
 (1) 漢字ひらがなまじり文で示し、当用漢字・現代かなづかい・新送りがなによつた。漢字については「二 漢字表記(1)」に準じた。

- (2) 当用漢字以外の漢字を用いるときには、下に( )で囲んでその読みを示した。また、当用漢字でも、音訓表にない読み方や誤読される恐れのあるものには読みを示した。ただし、次のような場合には、原則として当用漢字外の漢字でも読みを示さなかつた。  
 (3) 見出し語の漢字表記や解説など、同一項目内ですでにその漢字が使われ読みが示されている場合。  
 (4) 地名・人名・時代名や、「歌舞伎」「淨瑠璃」「三味線」などのような、古典を読む場合常識となつてゐる語。

(7) 助動詞の活用は用言に準じて示した。なお、活用のわかりにくい助動詞には「」内に全活用形を示した。  
 (8) 漢字かなまじりのゴシック体で示した子項目としての連語には、文法的性質を示さなかつた。  
 ○ただし、かな書きだけの連語の子項目には(連語)と示した。

(イ) その項目を参照した方がわかりやすいようなことばには「一」をつけた。

(ロ) 漢字の読みは原則として( )で囲んで示した。現代かなづかいと異なる歴史的かなづかいで示した読みは「へ」で囲んだ。

## (4)

解説文中の次に当たるものは、他の語と紛れぬように、原則としてカタカナで示した。

(イ) 外来語・動植物名・人体部分名・食物名・擬声擬態語・はなはだしの俗語・方言・神話中の固有名詞、その他当用漢字にない字や一般にカタカナで書かれることが多いもの。

〔例〕 い(名) クモの糸。クモの巣。

(ロ) それが現代語訳であることを特に強調したい場合。

〔例〕 あり・く【歩く】(自動四) ①今の、アルク。

## 3

語義がいくつかあるときは、原則として語源に近いものから ①…… ②…… ③…… として順に並べた。また、同じ語源であっても、当てられる漢字が違う場合や、品詞の種類が違う場合には、大きく、一…… 二…… と分けたこともある。また、必要に応じて ①②…… の中を、さらに小さく ①(イ)…… (ロ)…… のように分けた。

4 その条の見出し語についての語源的・語史的説明は( )で囲んで示した。

○その語の発音の歴史も( )の中に示した場合もある。

〔例〕 てい・け【天気】(名) 〔てんけ〕の撥音「ん」を「い」と表記したものという

もみぢ【紅葉・黄葉】(名) 〔上代は「もみち」。もみつ〕の連用形から)

しゃう・くわん【賞翫】(名・他動サ変) (後世は「しゃうぐわん」)

5 各語の位相は必要に応じて、上代東国方言・仏語(「仏語」の略)・歌舞伎用語・女房詞・遊里語などのように注記した。また、枕詞には団、ことわざには國とつけた。

○なお、枕詞については付録「枕詞一覧」を参照されたい。

## 6

説明・訳語をするのに当たっては、

(1) 最近の学説を広く参考してその成果を取り入れ、いつ

そう正しく古典を読解するよう努めた。

(2) なるべく平易な語を用い、語義が現代人に明確に伝わるよう苦心した。そのためには、特に次のよう配慮を行なった。

(イ) 少数俗語がかつた語でも、意義の解明に便利なものには、積極的に訳語として採用した。

(ロ) われわれの目に親しく触れるものに類似のものがあれば、極力それとの対比を試みた。

(ハ) 解説にわかりにくい語が出て来た場合には、ギヨウ

ジャニンニク(草ノ名)のように注記をし、理解の助けとした。

7 補助的解説には、次のようなものがある。

(1) 語義の解説のあとに、その見出し語の略語・同義語を「」、「」、「」、「」の形で、また、その対語を「」、「」、「」の形で示した。

(2) 「何何」の項を参照せよという意味を、左の形で示した。

↓「 」……なるべく参考してほしい場合

△「 」……必ず参考してほしい場合

(2) 見出し語に当たる部分は「 」で示し、それが活用語のときは、語幹を「 」で示し、活用語尾は「 」で区切ってその下に示した。

○活用語で終止形以外のある特定の活用形を見出し語とした場合は「 」だけで示し、「 」で活用語尾を区切ることをしなかつた。

○「す」「く」「みる」などの活用形で、語幹と活用語尾との区別ができるものはそのまましるし、見出し語に当たる部分に傍線を施した。

(3) 表わす季節がわかりにくい場合に限り、たとえば〔季・春〕

のようないわゆる季語として用いられる語については、その語の

○なお、季語については付録「季語一覧表」を参照されたい。

## 六 用 例

### 2

### 1

用例は次のようなめやすを設けてとつた。

(1) 人に広く親しまれているもの。

(2) 前後の文脈がわかりやすく、かつ、短く句切れるもの。

(3) 時代のなるべく古いもの、口頭語として生きて使われていた時代のもの。

用例の表記は、原典の形を改めて、現行流布の漢字ひらがなまじり文とした。この場合、漢字については「二 漢字表記 (1)」に準じた。

また、かな部分は歴史的かなづかいに統一した。

○歴史的かなづかいの表記は、「一 見出し 1 (2)」のかなづかいの解説に準じる。なお、後世撥音で発音される音節については、平安時代以前の文献によるものは「む」と表記し、鎌倉時代以後の文献によるものは「ん」と表記した。

引用文は「 」で囲み、その出典は「 」で囲んで示した。

(1) 引用文は「 」で囲み、その出典は「 」で囲んで示

### 3

用例の表記は、次のような形で補説・注釈や、漢字の読みを示した。

(1) 「(ドンナ願イ事デモ) 賴朝が一期の間はかなへん」の

ように( )で注釈を示した。

(2) 「賴朝が一期の間は(生キテイル限りハ)かなへん」の  
ように( )で注釈をつけた。

(3) 「賴朝が一期(ひきの)の間(あい)はかなへん」のように、漢字の読みをひらがな歴史的かなづかいによつて示した。

(4) 著名な和歌・俳句には全釈を施した。

### 4 出 典

出典は主として略称により、次の方針に従つて示した。

詳しくは、付録「用例出典一覧」を参照されたい。

(1) 室町時代以前の作品

(4) おもな物語・説話集・隨筆の類で、卷に分かれるものは

書名の下に示した。また、作品によつてはその両方を

示した。なお、「枕草子」は段数と冒頭の句を示した。

(例) [記・上] [源・桐壺] [伊勢・三]

[平家・祇王] [太平35新將軍] [宇治拾遺15・九]

[今昔4・八] [金槐・五月の御精進]

[枕・丸・五月の御精進]

○卷およびそれに準ずるもの数字は算用数字、段は平活字を用いた。

(口) 記述が年代を追つてあるものは、年号を示した。

(例) [東鑑・文治2] [御湯殿上・文明9]

(ハ) 歌集のうち、勅撰集および「金槐和歌集」「山家集」

には部立てを、「万葉集」には卷数を示した。また、特

に「万葉集」「古今和歌集」「新古今和歌集」には「国

歌大觀」の番号をつけた。

(例) [後撰・春上] [金槐・秋下]

[万5・八五] [古今・春下・八四]

(二) 謠曲・狂言・幸若舞には曲名、御伽草子には作品名

を示した。

(例) [謠・安宅] [狂・末広がり]

[幸若・高館] [御伽・鉢かづき]

江戸時代以降の散文・芸能は、作者名(またはジャンル)と作品名(あるものは卷・段まで)を示し、和歌・

狂歌・川柳は収載書名を、俳句は作者名のみをしるした。

(例) [宣長・玉かつま] [西鶴・一代男3]

[三馬・浮世風呂2・上]

[浮世・三代男]

[賀茂翁歌集] [柳樽]

[芭蕉] [淨・先代萩]

(3) 語義の説明に直接利用した出典の名は『』で囲んで示した。

(例) [和名抄] [守貞・漫稿] [俚言集覽]

七 参考欄

古典語をより深く理解するために役立つ解説を、参考として必要とする項の末尾に掲げた。そのおもな内容は次のようなものである。

(1) 語源・語史的な解説

(3) 発音の変遷

(5) 考慮すべき異説

挿し絵

ことばでは意を尽くしがたいものについての補助的説明

として、必要とする項に掲げた。

九 色刷り付図

色彩が重要な要素になるものや、個々の項目に掲げるよ  
りは、一括して示し相互に対比させる方が効果的であると  
考えられるものをまとめ、付図として卷頭に掲げた。

- あ(感)** ① 感動 驚きを表わす声。ああ。「よく駆けたるものかな。」  
「あ(驚) ② 人に呼びかける声。おい。「腰から下の二本の肢(ひ)をさす脚(あし)」  
「主人(お主) と云はば、即等さと出づべき体なりけり」[盛衰(せいさい)]
- あ(足)(名)** あし。「の音せず」[万4元8七] [脚注] 「あは、腰から下の二本の肢(ひ)をさす脚(あし)」  
「また特にくるふしから下の部分をさす「足」の古語。後「脚・足」とも「あし」とい。  
「あ」は複合語に残った。
- あ(群)(名)** あざく、「當田(とうだ)」の「はなち」[記・上]
- あ(吾・我)(代名)** 自称の代名詞。われ。「一はもよ女(め) にあれば」[記・上]。「吾妹子(わがめ)や」を忘こすな」[万12三] [脚注] 「あ」は「わ」に比べて、单数的・私的・恋情的な場合に用いた。
- あ(彼)(代名)** 遠称の事物代名詞。あれ。「淡路にて」は  
〔アレバ・ヘルカ都ニモ照ツテイル月ダナト〕とほるかに見し月の」[新古今雜上・五三]
- あ(感)** ① 物事に感動したる驚いたりした時に発する声。  
あら。「『——』とかたきて(リ首ヲカシゲテ)ゐたり」[源・若菜・上] ② 人に呼びかける声。やあ、「——ほら、あわてて事し損ずな」[話・安宅] ③ 人に答えて肯定する声。「そんなやつと五日だの『——』(三馬・浮世風呂上) —まうし(通語) 急ぐ気持を持つたり、驚いたりして人に呼びかけることば。ああ、もし。「『——』何事でおりやる」[狂・八句連歌]
- あ(あ・し・や・ご・し・や)(感)** 「ああ」は感動詞。「しやご」は「しや」と「かげ」の合字。「あ(あ・し・や・ご・し・や)」[狂・八句連歌]
- あ(笑)(感)** 声。「——、不思議やな」[清九・三社祭] 大笑いた、サアみんなよ、と味方に呼びかける意からはやし」とほどなる。「——、こはあざわらふぞ」[記・中]
- あ(あら)(感)** 「あら」の意を強めた形) もとに感動して発する声。「——」[新古今雜上・五三]
- あ(い・げ・う)(愛哭)** 「あい」は「愛哭」の約義に対し、アッハッハ、大笑いた、サアみんなよ、と味方に呼びかける意からはやし」とほどなる。
- あ(い・く・ろ・し)(形)** 「あいくろし」の形シキ。[形シキ] うがあつてかわいらしさ。「あいくろしげにほのめかし泣いて言ふ
- あ(い・し・や・ご・し・や)(感)** 「あい」の意を強めた形) もとに感動して発する声。「——」[近松・職人鑑・三]
- あ(い・い・こ)(愛語)** 「あい」の意を強めた形) もとに感動して発する声。「——」[國は阿波の徳島であります] [近松・傾城阿波の鳴門] ① かわいがること。愛撫(めい)。「いや打擲(うき)
- あ(い・さ・う)(感)** 神楽(かみぐら)のはやしのことば。
- あ(い・さ・う)(愛想)** ① (名) 他動サ変。② サービスする気持。サービスよくしないこと。③ 情けをかけること。もてなすこと。  
あいそ。「お前さんもお前さんだ。」  
あいきょう(ぶらう) ぶらうのいふ語。「——」[淨・普原・一] つめら梅(めい)が色ぞもりて見えにける」[淨・太功記]
- あ(い・あ・い・し)(愛愛)** (形シク) 愛想がよい。「まづ」こなたへとくべく」[馬琴・八大伝]
- あ(い・き・や・う)(愛敬)** ① (名) 「あい・ぎ・や・う①」に同じ。② づきあひ 愛敬付合(ひあ)」(名) ひととおりのつきあい。深くない交際。「さてそのほかは、——」[近松・小女郎・上] の守り 江戸時代、婚姻の新婦が胸にかけたお守り。夫婦和合のしるしとして。「幸ひの守り」の懐子(いはご)を乗物すぐに奥座敷にかき入れて、取りかはすなど」[西鶴・諸艶大鑑4] —の餅(もち) 「三日の餅(みづもち)」に同じ。
- あ(い・さ・う)(愛敬)** ① (名) 「あい・さ・う」のやうがあらう」[淨・桂川] ② 関係のなか、「そなたどもが身は口舌(ことわき)などある」か。[近松・五十年忌中] ③ 仲裁。調停。「他人」不和(ふわ)聞き(き)さうとは氣の毒ゆゑ、どうぞ(ニナントカ)一致(いっし)う」の顔(おもて)を断つ。「梅川殿(めいがわどの)」も吹ききんで此方から——り」[近松・冥途・中] — よし(通語) 仲(なか)がよい。むつまじい「殊(こと)更(い)づれも」——」[西鶴・永代蔵・三]
- あ(い・し)(感)** 美樂(みらく)の小前張(こまわら)で本方(もとがた)・末方(まつがた)が応答(おうとう)和解(わせ)するはやし」とば。「あいさ。」「あちめ」(祝イモチラ)聞こじ召すべき事(こと)」[源・葵] ② 優しさ。思いやり。「——なく人をもて離るる」(徒然草) ③ 新婚。「のほじめは」(祝イモチラ)聞こじ召すべき事(こと)」[源・葵] —づく(愛敬) (自動四) (多くは頬(ほほ)かわいらしさがある。「まみ・口(くち)いどき・き花やかなからだちなり」[源・空蝉] ) (ホトトギス) 夜深くも出だる(「鳴キガシタ) 声のらうらうじう(「上品デ美シク) —きたる、いみじう心(こゝろ)がれなし(「あこ(吉子)の約(あくど)」) 対し、アッハッハ、大笑いた、サアみんなよ、と味方に呼びかける意からはやし」とほどなる。「——、こはあざわらふぞ」[記・中]
- あ(い・し・ゆ)(愛熱)** (名) 愛情に心を奪われて、どうにもならない。煩惱(ぼんのう)の一つと考えられた。「愛着(あいじゆ)」[もとの御馳りあらまは給はで、——の罪を晴るかし聞こえ給ひ淨・八百屋(やほや)お七] 一切の交際を打ち切る。関係を断つ。「梅川殿(めいがわど)」も吹ききんで此方から——り」[近松・冥途・中] — よし(通語) 仲(なか)がよい。むつまじい「殊(こと)更(い)づれも」——」[西鶴・永代蔵・三]
- あ(い・し・ゆ)(愛憤)** (名) 愛傷歌(いじやうか)に同じ。 —か(哀傷歌)
- あ(い・す)(愛す)** (他動サ変) ① いとしく思う。かわいがる。「この虫(むし)を朝夕(あさとよる)に」—し給ふ(「堤・虫めづる) ② たいせつに扱う。大事にする。「けふあす御門(みやの)君のうつくしみ。」—し給ふ(「あがみを」) ③ 手(て)を入る。さげる。「——ほほの大勢(おおぜい)の中(なか)へ唯(ただ)二人入つたらば」(討チ入テ来ダト) ④ 何(なん)どこの事(こと)をかし出だすべき。よしよし、しばしけ。(エスキヨタキニサザテオケ) (平家裏・二度) 「女(めの)は子(こ)を——し。」(われ(リマエ)も耳(みみ)があるほど)、ひとの言(こと)ふことよく聞け」[西鶴・胸算用・五] ④ (男女が)イチャツク。乞う乞う。」「二人臥して、しつる顔(おもて)」[今昔(いまむなき)・三十一]

\*\* あい・な・し(形ク) 〔「あはひなし」〕「あひなし」〔「あいなし」〕  
かといふ。心にそまないのをいふ語。①しつりしない。好みしない。  
くない。「さりとも罪許してと思ふ御心おこらぞ。」かりける  
〔「本當コトダ」〕〔「源・夕顔」〕〔「源・夕顔」〕  
〔「六条御息所が伊保へ下ルトコロデ、若イ侍女タチハ」〕  
となり〔徒然草〕②無益だ。しない方がいい。「一かりける  
心くらべどもかな」〔シマラナ意地ノ張リキハダナ〕〔源・夕顔〕  
〔「あい・な・み」〕③〔特に連用形を副詞的に用いて〕  
自分の身に係る事のないもの。たゞほんの事だ。  
〔「六条御息所が伊保へ下ルトコロデ、若イ侍女タチハ」〕  
ばかりの道にて、かかる〔ステキナ源氏の君〕御有様を見れば  
捨てては別れ聞こえむ」と・く涙ぐみあへり〔源・寶木〕④  
(連用形を以て)心ならずも(つゝ)。「(コ)枕草子」  
う人のために便なき言ひ過ちもしつべき所もあれば〔枕・三九の草子〕⑤  
〔連用形を用いて〕それにも及ばない。いよいよ  
「人々驚き」めだたる覚ゆるに忍ばれず。う起き居つゝ鼻  
を忍びやかにみ渡す〔源・須磨〕

あい・な・だのみ(一類み)(名) あてにならないことをたよりにす  
ること。そらののみ。「つらき心を忍びて思ひなほらむ折を見  
付けむと、年月を重ねむ」〔源・帝木〕

あい・ぶ(愛別離苦)(名) 仏語「八苦」の一つ。親・兄  
弟・妻子など、日ごろ親しい人と別れる苦しみ。「会者定離  
離〔ひりり〕一度会ツタ者ハイカ必ズ別レル」の理〔般舟〕に、  
その物を覚ます。〔「太平記文眞義」〕

あい・や(感) ①否定の氣持を表わす語。いやいや、違う。「そ  
なたは薩摩わらであらう」〔「」〕、さうではなわけ!〔狂・柿夷〕  
②相手を呼びぢめ、または軽く押さえどめる事。ちょっと  
待つた。「」、忠裕殿われわれは、そのもの身貧な話聞きた  
は參らぬ〔黙阿弥・忠・慶太平記〕

あい・わ(代名) 人物を卑しめて呼ぶ語。あいつら。「一をせい  
を相手に言うてらちのあくことか」〔近松・職人鑑〕  
あい・ろ(文色)(名) ようす。形・物の区別。〔「あやめ」〕物  
のもの(見す)〔カケテ〕水鳥の〔淨・朝顔〕

あう、「い・く」<sup>(奥行)</sup><sub>(4)</sub>「(自動四) 奥の方へ行。もつと進む」。「人目を離さず走られるるを(ヨコマデ走<sup>(ツル)</sup>テ来テシマツタト)」。<sup>(1)</sup>かむことこそうすまにけれ(ヨコヨリ奥ヘハチヨリト)ト行キニ<sup>(カ)</sup>」「(枕<sup>(まく)</sup>九・五月の御精進)

あうぎ<sup>(奥義)</sup><sub>(4)</sub>「(名) 奥深い意味、極意。武略の道には一を求めるものなれば(保元・上)

あうしう<sup>(一)<sub>二</sub></sup>かいいだう<sup>(奥州街道)</sup><sub>(アシマジドウ)</sub>「(名) 江戸時代、五街道。また江戸から宇都宮本橋までの日光街道を除き、宇都宮から白河間のみをいうこともある。又(付岡24)

あうしゆく<sup>(一)<sub>二</sub></sup>ばい<sup>(鶯宿梅)</sup><sub>(アシタケイ)</sub>「(名) ウメの名木の名。村上天皇が紀内侍<sup>(きないし)</sup>の庭の紅梅を求められたこと、その木に、「鳴ならぬともかしこし」鶯の『宿梅』と問ははいかが答へむ」という歌が結ばれたので、天皇はこれを返されたという、その悔。「大鏡」に見える。

あうだ<sup>(便運)</sup><sub>(アシタク)</sub>「(名) 「あんだ①」に同じ。「死人の首も無さが、一に兒<sup>(こ)</sup>からて通るを見れば」(盛衰15)

あう<sup>(一)<sub>二</sub></sup>なし<sup>(奥無)</sup><sub>(アシム)</sub>「(形ク) 深い考證がない。軽はずみである。「(なにの)一・き言ひすぐをかはし侍らむ」(紫日記)

あうむ<sup>(【鶯宿】)</sup><sub>(アシタケ)</sub>「(名) 鳴る鳥の飼い手。其の主を巧みにまわる。「い、いどあはれなり。人のいふむことをまねぶらむよ」(枕四・鳥は) 一がへし「(鸕鷀返し)」(訓名) ①

相手の言行をまねてやり返すこと。<sup>(2)</sup>和歌のよみ方の一種。返歌の時、相手の歌の文句の一部だけを変えて、違った趣向の歌に詠じること。十訓抄<sup>(じゅうじんしやう)</sup>に載る語で「雪の上はありし昔に變はらねど、見に玉垂る内やゆかしき」に対して、藤原成範<sup>(アシハタ)</sup>が下の句を「内ぞゆかしき」と改めて返歌したおなかもの。<sup>(3)</sup>酒宴の席で相手のさす杯を受け飲んですぐ返杯すること。<sup>(4)</sup>一さかつき<sup>(鸕鷀杯)</sup><sub>(アシタケガラス)</sub>「(名) オウムガイなどつくった杯。」<sup>(5)</sup>鸕鷀<sup>(アシタケ)</sup>の杯<sup>(ガラス)</sup>「(名) 山中にある自然石で、とほやくの音をよく反響するもの。三重県の宮川の上流、志摩の磯部<sup>(いそべ)</sup>にあるものが最も有名。②歌舞伎の名セリフだけを書き抜いたもの。俳優のこのらふまるるために用いる。「一を見てよく口まねをするうよ<sup>(一) (滑稽・奥觀帖)</sup>」<sup>(6)</sup>「(名) 前項に(奥の)古風である。「一・りての名は、かうことの

ほかにてぞありける」[采花殿上の花見]

あうら(足占)(名) 上代の占いの一種。足(リクルアシカラ)下ノ部分)を以て吉凶を占うこと。具体的なことは不明。

「あうら」。初め潮、足に漬(つ)く時には「すす」[神代紀。下]。「月よみ(月ガヨニア)門に出で立ちして」[万12000]

あうん(阿吽)(名) 梵語(ボギ)の音訳。「阿」は口を開いて出す声で字音の最初、「吽」は口を閉じて出す声で字音の最後。密教では、この二字を宇宙の太初と窮極を象徴する根本真理とする。また、「阿」は出息、「吽」は入息で呼吸を行う。寺門の左右の仁王(ボヤ)や、狛犬(ボヤ)などが、一つは口を開き、「一つは口を閉じているのはこの二字の義を表わしている」[出で入る息に「ア」の二字を唱へ]「譯安宅」

あえか(形動ナリ)(少し触れただけでもわれぞな)弱弱しいようすにいう語。きやしゃ「世の人に似ず」。に見えしも〔源・夕顔〕〔翻〕「あゆ(自動下二)」と同様で、木の実が熟して落ちる意から、まさにそのような弱弱しくも危険な状態にあることを表わす。

あえを(他動四)「あやす(の転)」しただら。流す。「眼前の血を一すは社参(のがれ)〔淨・菅原〕あえーもの(名)似せたいもの。理想像。「親はらからより始め奉り、〔夕霧〕めやすき」にし給へるを〔ケッコウナアヤカリモノダト言ツテオラレタニ〕〔源・夕霧〕あか(赤)(名)①血や火の色。三原色の一つ。「あかいろ」ニオイ(スルマヤツフ)、すくべく(ニコワロ)焚(ともかせ)「近松・宵庚申・上」

あか(垢)(名)①今、アカ。②(フロア)垢を流すこと。「御剣を持ちて御ーに参りければ」[平治・中]「一も身のうち」[國不潔だといつて落とす垢も、もどかはだの一部分で存在の意から、不必要的と思われるもの何かの必要があつてあるのだと意。ごく少しあ減にみがきな」[だよ]「三馬・浮世風呂(2下)」③をぬく(連語)「良品」身の一部として化言(ひげ)せば、御機嫌もなるべし」[近松・五十年忌・中]

あか(闇加)(名)〔梵語(ボギ)の音訳〕①仏に供える水。またその容器「清(きよ)なる童などあまた出で来て」奉り、花折りなどあるも「〔源・若菜〕②船底にたまる水。「一の具〔闇加〕」を盛る器。「一は、例のきはやかに小さくて」〔源・御衣〕

鈴虫(ゼンムシ)——の水 仏に供える水。「闇加」。「一を結んで、父の後世をとぶらひ扶(さ)はれなる」[平家2成親]

あが(吾が・我が)〔連語〕私が。「心いたみも」〔思(う)妹〕〔万14玉藻〕②連体「〔上代では名詞の「あ」と格助詞「が」とに分かれるが、中古では、連体詞となつた〕」「わがに同じ私の自分の」。「姫君(源・玉鬘)」——御許(ごゆき)君相手を呼ぶ語。「一にそおはしましけ。あなた嬉しいと嬉しく〔源・玉鬘〕」

あかう(阿衡)(名)〔殷(ヤマト)古代中国ノ王朝ノ名〕伊尹(イイイ)の故事に之。阿(はたむ)衡(ハシ)は平。人民がそれにより右衛門(ハセモン)を得るの意。「宰相(摂政)閑白の異称。〔西鶴・胸算用5〕②赤さびた純刀を軽へつていう語。「さう銅(きだりな)」「淨忠臣蔵(ジンチョンジンザウ)

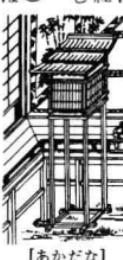
あかう(阿衡)〔名〕〔殷(ヤマト)古代中国ノ王朝ノ名〕伊尹(イイイ)の故事に之。阿(はたむ)衡(ハシ)は平。人民がそれにより右衛門(ハセモン)を得るの意。「宰相(摂政)閑白の異称。〔西鶴・胸算用5〕②赤さびた純刀を軽へつていう語。「さう銅(きだりな)」「淨忠臣蔵(ジンチョンジンザウ)」

\*\*は最重要語 \*は重要語 ♪は対語 ♪は参考語 ♪は必ず参照すべき語

**あかがり**〔赤〕(名) あかぎれ。「私ノカカトノ」—ふむな。  
**あかご**〔赤木〕(名) ①皮削削した木材。今「黒木」。常の年よりも見所多く、色くさり種類を尽くして、よしあるぐる木」のませを結びませつ〔源・野分〕 ②赤色の木材の総称。蘇芳〔さわ〕紫檀〔しらん〕花櫻〔はなざくら〕の類。「一のつかに銀の胴金〔だいきん〕巻きたる刀を〔盛装〕」  
**あがき**〔足搔き〕(名) ①馬などの歩み。「青駒の」を速み「万馬〔まつ〕」 ②もがき苦じること。また絶望的な努力。「前板まで足が前足で立った時などは、はねて散る水。」  
**あこう**〔足弓〕(名) ①「あけ」もも①に同じ。②検非使。の、看督長などの下役人が着た赤い狩衣〔ゆかぢ〕。「この檢非使どもの具の連レテキタ」など着たる物ども「栄花・浦浦の別」 ③召使などが着た「あらいぞ」に染めた布の狩衣。「一着たる男、鞆を持て来て」(枕・三毛・御前) ④すがた〔赤衣姿〕(名) 五位の人が朝服〔あわせ〕の縫〔し〕色の袍〔はふ〕を着た姿。「わらわらうしき」と清げなり〔源・落穂〕

**あかく**〔明かく〕(副) まだ暗くならないうちに。日中に。「あから」。「一大路〔だいろ〕」渡るが、かかるべきにや〔大鏡・伊尹〕 ②馬などがあひむ。「あがきをう」。「赤駒の」へとたきり「水ノ激〔しづか〕アワタチ」に「万二四」) ③わがく。「虎、さまに伏して倒れて」、「く」を〔宇治拾遺〕 ④あくせくと働く。「夜星」一して、三百は駆けかねるに〔近松・流鶴・上〕 ⑤小児がいたずらしてはねまる。遊びまる。「早く寝せて疾く起」、「昼」一かせたが万病円〔健康ニヨイ〕〔近松・鍬權三・上〕  
**あかく**〔赤朽ち葉〕(名) 染め色の名。「朽ち葉色」の赤みを帯びたもの。「のうすもののかみ、いといたうなれ」〔源・少女〕

**あかこま**〔赤駒〕(名) 赤みを帯びた毛の馬。赤毛馬。「にじくら」〔倭文〕「オオシタ靴〔おおぢ〕」も置きに〔万二四〕 ②明かるにする。よくわかるようにして、「次に大臣〔だいじん〕の御〔みやこ〕つづは〔リバ〕」—「さむ」〔説明ショウ〕とね」「大鏡後一条」 ③秘密をあばく。「あるがわざとも一しはべらず〔源・行幸〕 ④夜を明かす。「暮らみを帶びた下等米。」「赤」大唐米〔あかだい〕」。朝夕〔あさゆき〕も、



[あかだな]

**あかす**〔接尾四〕夜明けまでし続ける。「暮らす」。「夜はも息つき」、「万二三〇」  
**あかさ**〔明かさ〕(名) あかるさ。「望月〔みづき〕」を十合はせたばかりに「竹取」一部始終。是非善悪。「一聞き届けてうへのこと」〔近松・天網島・中〕  
**あかざ**〔葵〕(名) 食用になる雑草の名。ホウレンソウに似ているが、よく見えない。一たう〔葵堂〕(名) アカザの柱を立てて造った仮の仏堂。今の浅草觀音の起源にいう語。「そのころは葵間に目立つ」〔柳若〕 ①の葵〔あわせ〕そまな食作物来形容していう語。「紙のすま〔夜袋〕、麻の衣、鉢のまぼろし〔食器〕」、いくばくか人の費〔ひ〕えをなさん〔徒然草〕  
**あかさか**〔やっこ〕〔赤坂奴〕(名) 江戸時代、愛知県の赤坂から出て江戸の大名旗本に仕え、槍〔やり〕・抜〔ぬき〕箱などを持て供した若者〔わらわ〕、中間〔なかま〕の称。〔山の手奴〕、「一」距奴〔きのこ〕、年中〔毛槍〕振つても振りやま〔近松・隅田川口〕  
**あかし**〔明かし〕(名) ともしび。あたりの影、ほのかに透けて見ゆ〔源・夕顔〕 ②〔あかす〕の速用形) 一くらす〔明かし暮す〕(自動四) 夜を明かし日を暮らす。毎日を送る。「ただ涙にひかて」〔又レテ〕一させ給へば〔源・桐壺〕 ③ぶみ〔明かし文〕(名) 神仏に廟を立てる時、その意を書きしるした文。願文。「御」など書きたる心へなど〔源・玉蟹〕  
**あかし**〔明石〕(名) 兵庫県明石市。明石の浦は白砂青松の美景であり、源氏物語明石の卷でも知られている。歌枕の一。「なげきつての浦に朝霧のたゞ人を思ひやるかな」〔源・明石〕 ④ちぢみ〔明石縮〕(名) 絹織物の一種。寛文〔こうぶん〕七年の明石の縮次郎によつて創製されたといふ。横糸に強いよりをかけた糸を用いて「しほ」がある。さらさらした地質で夏着に用いる。「あかし」官。〔くにのみやつこ〕 ②〔大化革新以後〕姓〔ひな〕の一つ。〔源・明石〕(名) いかが見物。「一にはえ出で立たじや〔出カマセンカ〕」〔古今・雜下・六・詞〕 みこ〔県神子・鬼巫女〕(名) 諸國を勧進〔くんしん〕して「竈祓〔はなぶら〕」や神おろし口寄せなどを行なった巫女〔みこ〕。〔いちこ〕あづまみこ。〔すずしめの鉛をならして」一來たり「西鶴・一代男丁〕 ④「あがたの」  
**あかだな**〔伽耶棚〕(名) 仏に供える水や花などを置き、また道具などをすくために設けた棚。「一に菊紅葉〔きくべや〕など折りちらしたる」〔徒然〕  
**あかだま**〔赤玉〕(名) 赤い色の玉。〔一〕は緒〔はじ〕〔光れ〕〔記・上〕 ②琥珀〔こはく〕。  
**あがため**〔怠め〕(名) 「あがためのちのちもく」の略。諸國の國司を新たに任する年中行事。正月の十一日から三日間行なわれたので「春の除目」ともいう。〔外官〕の除目。キツカサメのちもく。「一に三箇